

戦前期清水幾太郎の著作群における「転向」の検討

——テキストマイニングの社会学的利用 3 ——

東京大学大学院 品治 佑吉

1 目的

太平洋戦後の左派のオピニオンリーダーとして著名な社会学者の清水幾太郎（1907-88）が、すでに戦前期から所謂「転向」を度々自覚的に行っていたという指摘が、鶴見俊輔（1960）や天野恵一（1979）を初めとする先行研究によってなされている。しかしながら、この問題について明快な判断を下すことは難しい。というのも、仮に清水の著述に変化が見られるとしても、それを自覚的な政治的立場の操作に由来する所謂「転向」とみなすべきか、それとも彼の社会学者としての理論的枠組みの変容によるものとみなすべきか、あるいは単に「時事論文か学術論文か」といった媒体や執筆目的の相違に由来するものとして捉えるべきかは困難な問題だからである。ゆえに、これらの複数の解釈可能性を慎重に腑分けして議論することが必要となる。

そこで本報告は、上記の先行研究にて解釈が分かれている1930年代初頭から太平洋戦争開戦直前期までの清水の著作群（清水禮子編 1992-3）を対象とし、そこで使用された用語とその個別具体的な使用例に着目した分析を行う。具体的には、用語の利用の全体的な分布を把握しつつ、同時にそれらの用語が個々の時期や著作でいかなる文脈で用いられているかの双方を把握した上で、清水の所謂「転向」のプロセスの内実をより詳細に検証することが本報告の目的である。

2 方法

本報告では、すでに人物研究の分野で応用が進んでいる（樋口 2014）テキストマイニングの手法を応用したテキスト読解を行う。具体的には、『清水幾太郎著作集』を中心とする戦前期著作群中の頻出語や重要語の時期ごとの使用数・用例を特定した上で、それらにいかなる時期的な特徴や変化が見られるかを、上記の先行研究を参照しつつ複数の分析視角を設定して検討する。

3 結果

以上の結果、清水幾太郎の著作における立場や記述の変化のうち、学術的な問題関心については、政治的・社会的な変化と連動した変化が確認される一方で、いくつかの点で先行研究では指摘されてこなかった一貫した概念や発想が存在することが明らかになった。

4 結論

以上の検討を通じて、個別の思想家の変化を対象とし、その検証作業を行う上で、テキストマイニングの手法の応用が有効であること、またそれを通じて、1930年代のような混沌とした時代状況の中で自己形成を遂げた清水のような思想家の歩みの分析において有効な視角を提供できるということを示唆し、具体的研究事例を通じて提示する。

文献

天野恵一, 1979, 『危機のイデオロギー——清水幾太郎批判』批評社。

樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。

清水禮子編, 1992-3, 『清水幾太郎著作集』全19巻, 講談社。

鶴見俊輔, 1960, 「翼賛運動の学問論——杉靖三郎・清水幾太郎・大熊信行」思想の科学研究会編『共同研究 転向 中』平凡社, 152-200。